

2026年度 第1回 豊岡市子ども・子育て会議 議事要旨

日時	2026年8月20日（木） 13時30分～15時35分	
場所	豊岡稽古堂 3階 交流室3-1	
出席者（委員）	瀬尾委員、佐藤委員、田中委員、河本委員、水田委員、内海委員、舟田委員、鈴木委員、永田委員、戸田委員、後藤委員、原田委員、水落委員、加藤委員	
（事務局）	若森部長、吉本部次長、旭課長、丸谷参事、山崎主幹、谷垣係長、高橋参事、道下参事、向原課長、三輪参事、細田課長補佐、樋口主幹、磯係長	
欠席者（委員）	井藤委員、森本委員、西垣委員	
会議次第	1 開会 2 部長あいさつ 3 委員の任命（辞令交付） 4 委員自己紹介 5 豊岡市子ども・子育て会議の概要 6 正副会長選出 7 議事 (1) 報告 - ア 児童数の推移について - イ 幼稚園・保育所・認定こども園の入園状況について - ウ 放課後児童クラブの利用状況等について - エ 地域子ども・子育て支援事業の取組状況について - オ 豊岡市の出生数の推移について - カ こども計画【戦略編】活動指標の達成状況について (2) 意見交換 8 その他 (1) 次回の会議日程 (2) その他 9 閉会	
配布資料	資料1	豊岡市子ども・子育て会議委員名簿
	資料2-1	豊岡市子ども・子育て会議の概要
	資料2-2	豊岡市子ども・子育て会議条例
	資料2-3	豊岡市子ども・子育て会議傍聴要綱
	資料3	児童数の推移
	資料4-1	幼稚園の入園状況
	資料4-2	保育所・認定こども園の入園状況
	資料5	放課後児童クラブの利用状況等
	資料6	地域子ども・子育て支援事業の取組状況
	資料7	豊岡市の出生数の推移
	資料8	こども計画【戦略編】活動指標の達成状況
	資料9	豊岡市の子育て支援施策の情報発信

議事要旨

1	開会	開会の宣言（事務局）
2	部長あいさつ	若森こども未来部長あいさつ
3	委員の任命	辞令交付（机上配布）
4	委員自己紹介	
5	正副会長選出	委員の互選により、水落委員を会長に、原田委員を副会長に選出
6	会議の説明	子ども・子育て会議等の概要について説明
7	議事 (1) 報告 事務局	ア 児童数について 資料3 質疑なし。
	事務局 会長 事務局 会長 事務局 会長	イ 幼稚園・保育所・認定こども園の入園状況等について 資料4－1～2 幼稚園の4歳児入園は設立時からか。 以前から4歳児だが、豊岡地域は途中から。 1つは、3歳児入園がないことが、幼稚園のこどもが減少する一要因なのではないか。もう1つは、幼稚園はこどもを預かる時間が短いことが、園児の減少の理由とのことだが、預かり保育の現状はどうなっているか。 幼稚園児も、放課後児童クラブを利用するが、あくまでも小学生が対象であって、小学生の受入後、余力があれば、幼稚園児を受け入れるという点もあり、小学生がいっぱいであれば幼稚園児は断らざるをえないという現状がある。 幼稚園については、これまで公立幼稚園は計画的に統合してきており4つになっている。3歳児受け入れは予定しておらず、今後幼稚園は閉園していく流れ。 今後豊岡市で、幼稚園を集約しつつ、こども園に移行していく中で、どういった保育を展開するか、例えば、2時半以降の保育活動に関して、預かり保育の中で、どういった保育を保障すべきなのか、今後考えていかなければいけないのではないか。
	事務局 副会長 事務局 会長	ウ 放課後児童クラブの利用状況等について 資料5 日高は定員を超えていて幼稚園児の利用ゼロということか。 そのとおり。 放課後児童クラブのこどもが増えていくこと自体別に悪いことではないと思う。一方で、放課後児童クラブが発達に差があるこどもたちをどのような形で預かっているのかという、量から質に変化していかなければいけない。 今後議論がさらに必要になる。
	事務局 会長	エ 地域子ども・子育て支援事業の取組状況について 資料6 多くの事業に取り組んでいること自体はすごくすばらしい一方で、（計画と

	実績の) 乖離の割合が事業によって全く異なっている状況。 委員にわかるように、乖離が生じた理由と今後の具体的な対策を追記されたい。一方で、乖離が起きないためにどういう取組みをしていくのかも、今後ご検討をお願いしたい。
事務局 副会長 会長	オ 豊岡市の出生数の推移について 資料7 第1期子ども・子育て支援事業計画を策定、実施してきて、第2期に入った2020年度からこどもの誕生が急激に減っている。緩やかにV字・U字回復していかないといけない。 副会長の主旨は、出生率を上げるだけでなく子育て世代に選ばれるまちづくりをどうするかを大切にしなければいけないということ。 例えば、豊岡市と人口はあまり変わらない市で出生数が上がってきているところをモデルにしながら、子育てのあり方とは何か、柔軟に変更して施策を考えていくことが大事。
事務局 委員 事務局 会長 事務局 会長	カ こども計画【戦略編】活動指標の達成状況について 資料8 子育て世代にいい環境づくりをする施策はとてもいい。 ところが、今の日本社会の中で、子育てをしながら孤立する、社会的孤立が非常に大きな課題になっている。 子育て相談件数はある程度増えている実態はあるが、豊岡市の中で子育てしながら、母親が孤立してしまっているとか、誰も関わらない、関わりにくいような状況にあるといった課題はないか。 市保健師は、妊娠期からすべての妊産婦に面接している。 その中で、積極的にいろんな施設に出ていけるタイプの母親と、シャイでなかなか集団に馴染めない、保健師と一对一の対面で話してもなかなか目が合わない母親もいる。 そういう方には、集団での教室よりは、保健師が家庭を訪問し、沐浴人形で赤ちゃんの入浴を練習する個別対応をしている。 保健師が個別対応をしているケースは子育て相談の件数には計上されない。 “やっぱり保健師も…”という方もあり、こどもが保育園に入っていれば、保育園の方が見守る中で、気がかりなことがあれば保健師につなぐネットワーク、連携は取っている。 相談件数の内訳として、外国にルーツがある保護者はどの程度か。 市内で年間300人ほどの出生数のうち約3～4%、実数では約10人。外国にルーツのある妊婦が、10件、13件と少しずつ割合は上がってきている。 これらの妊婦は、孤立というより、同国人のコミュニティの中で支え合う雰囲気があって、完全に孤立している人は少ない印象。 保健師もメールやアプリを駆使しながら繋がっている状況。 外部転入者が豊岡市に増えてきていることを考えると、外国にルーツがある

委員 委員	親子に対するケアを充実していくことによって豊岡独自の子育てにも繋がるのでは。 20ページの3行目、「地域がこども・子育てを応援している」の「こどもを含めた活動をしている地域コミュニティ組織の割合」が100%だが、具体的にどのようなものか。 例えばコミュニティセンターがプレイルームとかを開放してやっていることが含まれているのか。 豊岡市内に29館のコミュニティセンターがあり、すべてのコミュニティセンターに、多世代で自由に使っていただける「県民交流広場」という部屋が必ず設置されている。そこにこどもたちの居場所をつくるという考え方で計上では。
(2)意見交換 会長	豊岡市の子育て支援施策の情報発信 資料9 意見交換内容の概要は別添 子育て情報発信の目指す姿について様々な立場からの多くの意見があった。 必要な情報が必要な人に届くことと、知りたいと思ったときにすぐに情報が得られること。 そして、行政が伝えたい情報を発信するだけでなく、子育てをしている人が知りたい情報、役立つ情報を、わかりやすく身近に感じられる形で届けることが大事。そうした方向性が意見から見えた。 また後半ではその目指す姿に近づくために何ができるのか。すぐに取り組める工夫とか、少し時間をかけて考えなければいけない居場所づくりといった具体的なアイディア、施策が出された。 自分の娘の毎年の自由研究を見ていると、年齢を重ねるごとにこうしたいという目指す姿を描き、そこに向かうプロセスを考えて、かつ実際にやっている。 今日の意見交換でも、皆さんの中で目指すべき姿があって、それに対してどうしたらできるか、具体的な案をより活発に議論することによってすごく素晴らしいものが、豊岡の子育てを支えていくのではないかな。 今度は皆さんが話したことを、市として何ができる、何から始められるのかっていうのを具体的に検討していくことが大事になるのでは。
8 その他 (1) 次回の 会議日程 事務局	次回の会議については改めて連絡させていただく。

会長	これをもって本日の会議を終了させていただく。
9 閉会	副会長あいさつ

2026 年度 第 1 回 豊岡市子ども・子育て会議

議事(2) 意見交換 結果概要

1 意見交換の概要

(1) テーマ

グループ討議① 子育て情報発信の目指す姿

グループ討議② どうなったらいいか、どんなことができたらいいか

(2) 進め方

出席者を 3 グループ（A・B・C）に分け、上記 2 つのテーマについてグループ討議を行った。討議の内容はボイスレコーダーで録音し、その音声データを市民参加型合意形成プラットフォーム「シビックとよおか」に取り込んで記録した。

(3) 意見の整理方法

取り込んだ音声データを文字起こしし、発言を意見の単位に区切ったうえで、論点ごとに分類した。区切られた意見の数は、グループ討議①が 143 件、グループ討議②が 111 件、合計 254 件である。分類、頻出語の集計及び意見の傾向の判定には A I による分析機能を補助的に用い、文字起こしを確認のうえ事務局が整理した。また、掲載した意見は発言の要旨であり、発言そのままの表記ではない場合がある。個々の発言者は特定していない。

2 グループ討議①「子育て情報発信の目指す姿」

(1) 意見の分布

論点	件数	論点の要旨
コミュニティとロコミの力	29	人づて・現地での会話が最も信頼される情報源になっている
配信チャンネル	28	どの媒体で誰にどう届くか（SNS・LINE・紙・ホームページ等）
コンテンツ設計	22	短時間で関心を引き、行動に結びつける情報の構造と表現方法
利用者ライフステージとニーズ	16	こどもの年齢や保護者属性ごとの情報接点と必要な情報の変化
信頼性・発信者属性	11	誰が発信しているかによって受け取られ方が変わる
行政の集約・運用設計	6	情報の一元化、導線設計、運用負担と継続性への配慮

（意見 143 件、分類件数 112 件）

(2) 主な意見

ア コミュニティとロコミの力（29 件）

子育てセンターでの出会いやママ友同士のロコミが、実質的な主要情報源になっている。立ち話や行事の場で交わされる何気ない会話の中に有益な情報が生まれているとの意見が多かった。一方で、核家族化やコロナ禍以降の地域活動の休止により見守りが希薄になり、孤立のリスクが高まっているとの指摘があった。ロコミだけに頼らず、公式に発信する機会を増やすべきとの意見もあった。

（意見の例）「情報は人とのつながりの中で届くのが一番信頼できる」「在宅育児中のお母さんは保育園の送り迎え時の短い会話が貴重である」「核家族化で身近にすぐ聞ける人がいないことが課題」

イ 配信チャンネル（28 件）

SNS のショート動画は、関心を引く「入口」として機能する。紙媒体・フリーペーパーは一覧性が高く、家庭内で共有しやすい点に強みがある。ホームページ・PDF は詳細情報の格納場所として重要であるが、第一の情報源にはなりにくい。LINE は世代を横断して使われており利便性が高いものの、認知度に課題がある。園・施設の連絡アプリは確実に届く一方、外部への情報の広がりが限定的である。

（意見の例）「豊岡市のホームページは一番に見る選択肢に上がってこない」「紙なら子どもと一

緒に見て『どこ行こうか』と共有できる」「豊岡市のLINEは便利だが認知度がまだ低い」

ウ コンテンツ設計 (22 件)

写真や動画は、雰囲気や楽しさを伝える力が高い。スマートフォンでの読みやすさが情報の受け取りやすさを左右するため、文字サイズやPDF ファイルを避ける配慮が必要である。入口では要点・写真・キーワードで概観を示し、詳細へつなぐ構成が求められる。また、「すぐできそう」と思える行動喚起がなければ、忙しさの中で後回しにされてしまうとの指摘があった。行政文書的な説明を避け、保護者の視点に立った、肩の力を抜いた表現も有効とされた。

(意見の例)「資料を開くとPDFが出てきて一行ずつ読むのが大変」「情報の一部だけを見て判断する世代に長文を届けるのは難しい」

エ 利用者ライフステージとニーズ (16 件)

乳幼児期は子育てセンターやこども園などで接点が多く情報を得やすいが、就学後は保護者同士の接点が急に希薄になる。中高生期には、そもそも何の情報を得るべきかが分かりにくくなるとの意見があった。父親層の情報取得経路が見えにくいこと、発達に特性があるこどもの家庭や、外国にルーツがあり日本語が不自由な家庭への発信も課題として挙げられた。

(意見の例)「小学校はこどもが一人で行くため、保護者同士が顔を合わせる機会がない」「お父さんは『遊び場』の検索なら自ら動く可能性がある」「発達に特性がある子も伸び伸び生きられる地域にしたい」

オ 信頼性・発信者属性 (11 件)

誰が発信しているかによって、情報の受け取られ方が大きく変わる。日常の誠実な行動を見せ続けることが、発信の信頼性を高めるとの意見があった。相談の受け手を複数用意する体制や、地域のインフルエンサーとの連携も有効とされた。

(意見の例)「園の周りを掃除し、こどもを大事にしている姿を見せることも情報発信の一つ」「第一印象が悪いと、その人からの情報は全く聞いてもらえなくなる」

カ 行政の集約・運用設計 (6 件)

「ここを見れば安心」と言えるワンストップの導線と、年代別の導線の整備が求められる。あわせて、継続的な発信を支える運用体制や人的資源への配慮が必要であるとの指摘があった。

(意見の例)「豊岡のことを知らない人は人に聞くしかないのが現状である」「行政の取り組みが市民に全然届いていない」

3 グループ討議②「どうなったらいいか、どんなことができたらいいか」

(1) 意見の分布

論点	件数	論点の要旨
地域の居場所・物理的支点	16	こどもや保護者が気軽に行ける、安全で使いやすい場の整備
発信チャンネルと表現	7	紙・SNS・通知など、媒体と見せ方を最適化して届きやすくする
学校・保護者連絡の整備	7	学校・園との確実に負担の少ない連絡手段と、継続的なつながり
世代間交流と参加促進	7	高齢者とこども・親世代が自然に交わる場と参加ハードルの低下
市民発信者の育成と仕組み	4	地域の発信者を育て、還元や収益化により持続可能にする
デジタル機能と市民スキル	4	ツールの機能整備と市民向けスキル講座による支援
ターゲティングと配信設計	3	必要な情報を必要な人に届ける配信設計と検索性の向上
信頼・プライバシー・品質管理	3	個人情報保護と情報の信頼性の確保
コミュニティ運営とルール作り	3	継続的な運営・参加促進のための組織化、ルールと包摂策

(意見 111 件、分類件数 54 件)

(2) 主な意見

ア 地域の居場所づくり (16 件)

空き家や既存施設を活用し、生活圏の中に「いつでも行ける場」をつくる提案が最も多かった。場が生まれること自体が情報の流通を改善するとの指摘があった。送迎のしやすさや、大人が常駐している安心感が利用のしやすさを左右する。新設ではなく、既存のコミュニティセンタ

一・公民館の活用が現実的な第一歩とされた。

（意見の例）「空き家を活用していつでもおいでと言える広場を作りたい」「人が集まる場所になれば情報の取りやすさが格段に上がる」「今あるコミュニティセンターを拠点としてフル活用するのが一番早い」

イ 学校・保護者連絡の整備（7件）

紙のお便りは子どもを介するため保護者に届かないことが多く、デジタル化により確実性の向上と負担の軽減が期待される。就学後・卒園後も保護者同士が緩やかにつながり続ける仕組みが求められた。

（意見の例）「学校からの紙のお便りは子どもから親へ届かないことが多い」「卒園後も緩やかにつながれるグループLINEやメールを活用する」

ウ 世代間交流と参加促進（7件）

既存の高齢者向け活動に子ども世代を巻き込むことで、双方に良い効果が生まれるとの意見があった。単発のイベントではなく、毎月の定例活動として交流の機会を設けることが継続につながる。初めて参加する人の不安を軽減する工夫も必要とされた。

（意見の例）「社会福祉協議会のサロンにお年寄りだけでなく子ども世代も巻き込んでほしい」「イベントではなく毎月の定例活動に交流の機会を作りたい」「初めての場所は入りづらさや不安がある」

エ 発信チャンネルと表現、ターゲティング（10件）

世代や属性に応じて媒体を使い分け、紙とデジタルを併用することが必要である。行政からの一方的な発信ではなく、身近で分かりやすい表現が求められた。通知は重要度が伝わるタイトルにしなければ見落とされる。職場を通じた制度の周知や、デジタルのロコミの活用も有効との意見があった。なお、写真については、子どもの顔が写らないと内容が伝わりにくいとの指摘もあり、個人情報への配慮と伝わりやすさの両立が課題である。

（意見の例）「高齢者には紙媒体、若い世代にはSNSなど世代に合わせた発信が必要」「職場が子育て情報の提供や制度の周知を担うと一番頼りになる」

オ 市民発信者の育成とデジタルスキル（8件）

市が動画編集やデザイン等の講座を開催し、地域の発信人材を育てる提案があった。講座を副業支援や収入につなげる仕組みとすることで、持続可能になるとの意見も出された。既存の媒体に届いていない層への工夫も重要とされた。

（意見の例）「動画編集やデザインの講座を市が開催し人材を育成する」「既存の地域情報誌を知らない層へ情報を届ける工夫が必要」

カ 信頼・プライバシーと運営の仕組み（6件）

行政が運営に関わることが、オンラインの場の信頼性を担保するとの意見があった。あわせて、トラブルを防ぐルールの整備と、担当者の異動に左右されない運営体制が前提となる。

（意見の例）「行政が運営に関わるオープンチャットがあれば信頼して利用できる」「公立施設でも異動に左右されず交流が続く仕組みを工夫する」

4 意見交換全体を通じて見えた方向性

(1) 最も信頼される経路は「人」である

ロコミや対面の雑談が実質的な主要チャンネルとして機能している。公式の発信は、それを置き換えるのではなく、後押しし補完する設計が求められる。

(2) 「入口」の設計が鍵となる

写真・ショート動画・要点の要約で関心を引き、詳細へつなぐ導線を整える。長文やPDFを前提とした発信は届きにくい。

(3) ライフステージに応じた接点の維持

乳幼児期は接点が多い一方、就学後は急速に希薄化する。年代別の導線と「ここを見れば安心」と言える一元的な窓口が課題となる。

(4) 場（居場所）と情報は一体である

人が集まる場が生まれれば情報の流通も改善する。既存のコミュニティセンター・公民館の活

用が現実的な第一歩となる。

(5) 発信の担い手を広げる

行政単独ではなく、市民発信者・職場・園などの多様な主体が担い手となる。市はスキルの育成と信頼の担保という役割を担う。

(6) 継続性と配慮を前提とする

担当者の異動に左右されない運用体制、個人情報への配慮、オンラインの場のルールの整備が、取組の前提となる。

5 参考

(1) 意見の傾向

	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ	合計
グループ討議①	66 件 (46.1%)	29 件 (20.2%)	48 件 (33.5%)	143 件
グループ討議②	72 件 (64.8%)	25 件 (22.5%)	14 件 (12.6%)	111 件

自然言語処理による機械的な判定である。現状の課題を指摘する意見はネガティブ、具体的な提案はポジティブに分類される傾向がある。グループ討議①では課題の共有が中心となり、グループ討議②では提案が多くなった。

(2) 頻出キーワード

グループ討議①	情報／こども／LINE／インスタグラム／紙／ホームページ／センター／動画／SNS／写真／デジタル／世代／地域／行政／ロコミ／お母さん／小学校／つながり／遊び場／豊岡
グループ討議②	情報／こども／コミュニティ／チャット／ロコミ／仕組み／居場所／場所／センター／公民館／デジタル／世代／身近／地域／学校／行政／紙／年寄り／イベント／ニーズ

発言に出現した語を出現回数の多い順に整理したものである（「する」「思う」等の一般語を除く）。

以上